

# 教養科目としての音楽の授業についての一考察

## 授業に関するアンケート調査をもとに

中野 研也

仁愛大学人間生活学部

A study of Music as a Liberal Arts Subject  
Based on a Questionnaire Survey about the Classes

Kenya NAKANO

Faculty of Human Life, Jin-ai University

大学における音楽あるいは音楽関連の科目は、なにも音楽大学や教育系の大学だけの科目ではなく、一般教養科目として音楽／音楽関連の科目が置かれている大学は多い。では、音楽家や音楽の教員を目指す学生はいざ知らず、そうでない学生が音楽を「学ぶ」ことの意義はいったい何なのだろうか。そこで学ぶ内容は、自らの音楽活動や保育・教育の場における音楽活動をリードするための楽器演奏や歌唱のスキル、あるいは実践的な音楽理論や音楽活動の指導法とはまた別のものであり、その目的もまた違ったものとなる筈である。このような一般教養としての音楽／音楽関連科目の存在意義、そこで学習する内容と期待される成果について、実際に授業を担当する者として考えてみたい。

キーワード：音楽，教養，クラシック音楽，音楽史，リベラル・アーツ

### 1. はじめに

筆者は楽器の演奏を行うことを目的として、音楽大学（以下、音大）で演奏学を学んできた。音大における音楽／音楽関連の科目は、専攻実技の他にソルフェージュ（視唱・聴音）、楽典（基礎的な音楽の知識）、和声学、音楽史、音楽美学等さまざまなものがあるが、これらの科目は音楽を論理的に理解し、作品の持つ背景を知ること、より良い演奏に繋げることを目的としている。これらのうちの何れか、たとえば音楽史に強い興味を抱くことがあったとしても、それを学ぶ最終的な目的としては、音楽に関する知識や理解を、演奏等の音楽活動に生かすためのものとなる。音楽それ自体を目的とするという意味で、これが作曲の分野であれ音楽学の分野であれ、変わりはない。

このように筆者は音楽そのものを目的として音楽と関わっていたが故に、音楽を専門としない学生がわ

ざわざ音楽を教養として勉強することの意義は何なのか、本当のところは今日まで解らないままであった。なぜなら筆者は、自分が専門とする西洋クラシック音楽以外の音楽に接し、仮にそれを素晴らしいと感じたとき、多くの場合その素晴らしさの理由などは考えないからである。音楽においてすら専門とするジャンルが違えばこのような状況であるのに、ましてや美術鑑賞やスポーツ観戦などにおいて自分が感動した理由を改めて考えることは殆どなく、ただ楽しむだけである。これと同じように、音楽の専門でない学生は、好きな音楽を楽しむことができればそれで十分ではないか、との思いが強かった。

さて、世の中には音楽家や、音楽家を目指す者でなくとも、音楽を愛する人が数多く存在する。実際、授業において「音楽が好きな人は手を上げてください」と質問すると、ほぼ全員の手が上がる。他にも例を挙

げると、音楽産業は巨大なビジネスとなっており、携帯音楽プレーヤーあるいはスマートフォンを利用する大きな目的の1つが音楽に接するためであるのは紛れもない事実である。また、その多くは音楽家ではないが、音楽を愛する人々である。筆者はこのような人々に対して音楽の素晴らしさを“わざわざ説明する”ことは、野暮な行為ではあるまいか、との疑念を長らく払拭することができなかった。音楽を専門としているのであれば、音楽において感動したその理由を分析・考察し、その成果を自らの活動に生かしていくことは必要なことである。しかしそうでない人にとって、その理由をことさら考える必要性は大きくないと考える。しかし、それでも音楽作品の背景にあるものを知ることや、アーティストに関する予備知識をもつことによって、その音楽に対する理解を深め、それが感動を増大させる場合があるのもまた事実である。

リベラル・アーツにおける“教養としての音楽”を論ずることは筆者の専門の域を超えてしまうが、音楽に関する幅広い知識を身につけることによる、人間が生まれつき持っている音楽に感動する力をより高めていくことを目的として、教養科目としての音楽の授業のあり方と、そこで伝えるべき内容について考えてみたい。

## 2. 現状における授業で扱う内容

筆者は、「音楽の世界／芸術の世界」という授業で、大学における音楽一般の授業を担当している。音楽と一口に言っても世界には多種多様な音楽があり、その成り立ちや社会における位置付け、人と音楽との関係もまたさまざまである。これら世界中の音楽の全てを包括的に取り上げることは物理的にも指導者の専門性という意味でも不可能であるが、幸いこの日本における音楽の状況としては、西洋クラシック音楽はもとより、ロック、ポップス、ジャズ、映画やドラマの音楽、そして幼児音楽にアニメやゲームの音楽など、その割合を数字で表すことはできないものの、音楽の大半を占めているのは西洋音楽である。従って本稿の場合、この西洋音楽を軸に、西洋音楽以外の音楽についてはそれとどのような違いがあるのかという視点で論じていくこととなる。西洋音楽以外の音楽の扱い方として、

これが妥当であるかどうかはさておき、授業を受ける学生もまた西洋音楽に囲まれ、西洋音楽に馴染んでいるといった状況においては、ひとつの合理的な見方であると考えられる。

さて、この授業で学習する内容の概略を示すと、次のようになる。

- ・音のしくみ
- ・音楽の起源
- ・リズム、メロディー、ハーモニーの理論を基とした音楽の成り立ち（複数回）
- ・西洋クラシック音楽について（複数回）
- ・民族音楽の紹介
- ・ジャズについて（複数回）
- ・録音技術やメディアの発達とポピュラー音楽との関係

これらの内容を、各テーマにおける代表的な楽曲の幾つかを紹介するとともに、その楽曲の成り立ちや歴史的・文化的背景を交えて取り扱っている。年毎の、あるいはテーマ毎の学生の反応などをもとに、必要に応じて改訂を加えつつ授業を行っているが、内容をより有意義なものとするのと、少しでも多くの興味を受講生に持ってもらうことを目的として、授業に関するアンケート調査を、授業を受けた学生全員を対象に実施した。

## 3. 授業に関するアンケート調査について

授業で取り扱っている内容は、身も蓋もない言い方をすれば、知らなくても特に困らない事ばかりである。しかし、だからこそ学生に授業内容に興味をもってもらうことが何よりも重要であり、そのためには学生の音楽に対する考え方や音楽の嗜好を知る必要があると考えた。そこで、授業で扱ったテーマに関する質問だけでなく、受講生が日常接する音楽についての質問を以下のように設定した。また、実施にあたっての時間的な制約があったため、質問への回答は全て選択方式とした。

質問① 興味を持った授業各回のテーマは何か

質問② よく聴く音楽のジャンルは何か

質問③ 授業を通して新たに興味をもったジャンルがあるか

質問④ クラシック音楽について

質問⑤ ジャズについて

質問⑥ 受講したことによる音楽の聴き方の変化について

質問⑦ 授業で紹介した楽曲で印象に残ったものは何か

#### 4. アンケート調査の結果から

このアンケートは、「音楽の世界」および「芸術の世界」を受講する学生全員を対象に行い、145名より回答を得た。ここにアンケートの全文と集計結果を示すが、選択項目は回答数の多い順に並べ替えた。なお、質問③については回答が1つだけの質問への複数回答が2件あったため、集計欄の合計が回答者数145名を上回っている<sup>(\*)</sup>。

質問①

この授業を通して、あなたがいちばん興味を持った内容を次から1つ選んでください。

集計	選択項目
59	様々なジャンルにおける楽曲・作品そのものについて
22	音楽の歴史や文化的背景について
18	音楽が人間に及ぼす作用、音楽の持つ力について
17	音のしくみや性質について
15	音楽を構成する要素（リズム、メロディー、ハーモニー）について
8	音楽と美術との関係等、他分野との関連について
6	音楽の制作や録音技術について
145	計

質問②

あなたが普段よく聴く音楽のジャンルは何ですか？

(答はいくつでも)

集計	選択項目
88	邦楽ロック/ポップス
57	洋楽ロック/ポップス
17	クラシック音楽
17	ジャズ
9	オペラやミュージカル等の総合芸術における音楽
4	民族音楽や日本の伝統音楽等、西洋音楽以外の音楽
22	その他 (内訳:K-POP/6, 吹奏楽/2, ヒップホップ/2, ラップ/2, ゲームミュージック/2, ボーカロイド/3, EDM/1, アニメソング/2, 無回答/2, ネット音楽/1,)
214	計

質問③

この授業を通して、あなたが新たに興味を持った音楽のジャンルがあれば教えてください。(1つ選択)

集計	選択項目
67	ジャズ
33	洋楽ロック/ポップス
31	クラシック音楽
9	特になし
7	民族音楽や日本の伝統音楽棟、西洋音楽以外の音楽
147	計*

質問④

クラシック音楽に関して、あなたに当てはまるものを1つ選んでください。

集計	選択項目
96	ときどき聴いてみたくなる。
29	よく理解できない、あるいは退屈なのでほとんど聴かない。
20	クラシック音楽が好きである。あるいは普段からよく聴いている。
145	計

質問⑤

ジャズに関して、あなたに当てはまるものを1つ選んでください。

集計	選択項目
105	ときどき聴いてみたくなる。
21	よく理解できない、あるいは退屈なのでほとんど聴かない。
19	ジャズが好きである。あるいは普段からよく聴いている。
145	計

質問⑥

音楽の理論やしくみ、文化的・歴史的背景を知ること、音楽に対する理解が深まった、あるいは音楽の聴き方に何らかの変化があったと感じられますか？

(1つ選択)

集計	選択項目
74	多少は理解ができたような気がする、あるいは多少の変化が感じられた。
63	音楽への理解が深まった、あるいは聴き方に変化が感じられた。
8	音楽に対する理解度や音楽の聴き方については、特に変化は感じられない。
145	計

質問⑦

授業で紹介があった作品のなかで、印象に残ったものにチェックマークを入れて下さい。(答はいくつでも)

集計	選択項目
85	ルパン三世のテーマ/演奏:大野雄二(ビブラフォン)他(第12回,第13回「ジャズの世界」)
66	ビゼー:オペラ「カルメン」より/クラシック(第8回「音楽鑑賞」)
47	モーツァルト:オペラ「魔笛」より“夜の女王のアリア”/クラシック(第6回「西洋クラシック音楽①」)
42	ウィー・ウィル・ロック・ユー/ロック(クイーン)(第4回「音楽の3要素 その2〜リズムについて」)
40	シング・シング・シング(スウィング・ジャズ)/演奏:ベニー・グッドマン(第12回,第13回「ジャズの世界」)
37	聖者の行進(ディキシーランド・ジャズ)/演奏:ルイ・アームストロング(第12回,第13回「ジャズの世界」)
35	チャイコフスキー:悲愴/クラシック(第3回「音楽の3要素 その1〜メロディーについて」)
29	ノルウェイの森/ロック(ビートルズ)(第9回「世界の民族音楽と日本の伝統音楽」)
27	ホロヴィッツ:カルメンの主題による変奏曲/ホロヴィッツ(第8回「音楽鑑賞」)
25	ジョンケージ:4分33秒/20世紀音楽(クラシック)(第1回「音とはなにか」)
24	寿限無(フリー・ジャズ)/演奏:山下洋輔(第12回,第13回「ジャズの世界」)
23	グレゴリオ聖歌/中世の宗教音楽(第2回「音楽の誕生」)
20	ラヴェル:水の戯れ/クラシック(第10回,第11回「美術の世界,美術と音楽との関連」)
19	バッハ:トッカータ ニ短調/クラシック(第3回「音楽の3要素 その1〜メロディーについて」)
17	バッハ:24のプレリュードとフーガよりプレリュード第3番/クラシック(第3回「音楽の3要素 その1〜メロディーについて」)
16	プッチーニ:オペラ「ラ・ボエーム」より“私の名はミミ”/クラシック(第6回「西洋クラシック音楽①」)
15	バッハ:小フーガ/クラシック(第6回「西洋クラシック音楽①」)
13	ダンシング・イン・ザ・ストリート/R&B(マーサ&ザ・ヴァンデラス)(第2回「音楽の誕生」)
13	テイク・ファイヴ/ジャズ(演奏:デイヴ・ブルーベック)(第4回「音楽の3要素 その2〜リズムについて」)
13	荒野の果てに/賛美歌・宗教音楽(第5回「音楽の3要素 その3〜ハーモニーについて」)
13	スウィングがなければ意味がない(スウィング・ジャズ)/演奏:デューク・エリントン(第12回,第13回「ジャズの世界」)
13	ソング・フォー・マイ・ファーザー(ハード・バップ)/演奏:ホレス・シルヴァー(第12回,第13回「ジャズの世界」)
12	アジアを中心とした民族音楽の各曲(第9回「世界の民族音楽と日本の伝統音楽」)
12	チュニジアの夜(ビバップ)/演奏:アート・ブレイキー&ザ・ジャズ・メッセンジャーズ(第12回,第13回「ジャズの世界」)
11	漆かき唄/日本の民謡と西洋音楽との融合(日本)(第9回「世界の民族音楽と日本の伝統音楽」)
9	スカボロー・フェア/フォーク(サイモン&ガーファンクル)(第5回「音楽の3要素 その3〜ハーモニーについて」)
9	ストラヴィンスキー:春の祭典より/クラシック(第7回「西洋クラシック音楽②」)
8	ブルー・ロンド・ア・ラ・ターク(クール・ジャズ)/演奏:デイヴ・ブルーベック(第12回,第13回「ジャズの世界」)
4	無調音楽や実験的音楽などの20世紀音楽(クラシック)(第7回「西洋クラシック音楽②」)
697	計

集計結果は以上である。これをもとに各項目について、授業で取り扱う内容とも関連させながら考察する。

質問①「授業を通して興味を持てた内容」については、7つの選択項目のうち「各ジャンルの楽曲そのものについて」の回答が半数近くを占めた。これはほぼ予想どおりの結果であったが、興味深いのは「音楽の歴史や文化的背景(2位)」「音楽が人間に及ぼす作用、音楽の持つ力(3位)」「音の仕組みや性質(4位)」「音楽を構成する要素(5位)」について、授業を通して関心を持った受講者が、それぞれ1割を超えたことである。特に5番目の「音楽を構成する要素」に関しては、一般に難解とされる音楽理論的要素を避けて通ることができないのにも拘わらず、授業における反応は良好であり、試験での正答率も高かった。ここから、たとえば音楽の専門家を目指していなくとも、音楽の背景や理論について、ある一定の関心を受講生は持っていることが見て取れる。中でも、人間がメロディーやリズムを認識するための「ゲシュタルトの原理<sup>(1)</sup>」や「スキーマ<sup>(2)</sup>」に関して、この傾向が特に強く見られた。

また、「音楽の歴史や文化的背景」のポイントが高かった点については、一般的なクラシック音楽をJ.S. バッハ登場後(18世紀~)とした場合、その歴史は基本的に近世の歴史と時代が重なっており、ジャズ、ロック/ポップスは近代史あるいは20世紀のカルチャー史の重要な部分を占めていることから、既存の知識との関連性の高さも影響していると考えられる。

質問②「よく聴く音楽のジャンル」については、全214回答(複数選択可)のうち、邦楽ロック/ポップスと洋楽ロック/ポップスを合わせた数が145回答と、過半数を大幅に上回っており、特に邦楽ロック/ポップスのみで4割を超えている。筆者はこれまで、邦楽ロック/ポップスすなわちJ-Popに関しては、普段から学生が親しんでいる音楽を改めて授業で取り上げる必要性は薄いと考えるから、基本的に授業では扱ってこなかったが、講述の質問⑥の結果を合わせ、音楽を理論の面から説明するための素材になり得ると考えた。

質問③「授業を通して新たに興味を持てた音楽のジャンル」では、ジャズが67名(46%)と全体の半数近くに達した。質問⑤の集計において、「普段ジャズ

を好んで聴く」の回答 19 名と「ときどき聴いてみたくなる」と回答した 105 名とを合わせて 124 名 (86%) という高い数値となったことと符合している。その理由として、「シング・シング・シング」のような普段無意識のうちに耳にしているようなスタンダード曲を改めて紹介したことや、一見自由奔放に行っているように見える即興演奏において実は厳格なルールが存在すること、そのことと社会における“自由”との関連、本格的なジャズでなくとも、ジャズ的な要素は多くのジャンルの曲に取り入れられていることが、高い関心を持った要因と考える。また、同じ質問に対するクラシック音楽の約 2 割という数字を高いと捉えるか低いと捉えるか、これを次の質問④「クラシック音楽について」の結果とともに考察する。

質問④「クラシック音楽について」の集計結果で意外であったことは、「ときどき聴いてみたくなる」と回答した学生の割合が 2/3 に達したことである。ここに「普段からクラシック音楽を好んで聴いている」を加えると、実に 80% という高い数値となった。アンケート調査を行う前の予想では、授業における反応や世の中におけるクラシック音楽の立ち位置を考慮して、およそ半数ぐらいの受講生は「よく理解できない、あるいは退屈なのでほとんど聴かない」の項目を選択するであろうと考えていたが、この結果は予想外であった。理由は幾つか考えられるが、ここでは 2 つ挙げたい。第一に、若者が聴く音楽の嗜好が 20 世紀後半のようなロックやポップス一辺倒ではなくなり、選ばれるジャンルが多様化したことで、クラシック音楽も数多くの音楽ジャンルの中の一つとなったことである。また、「のだめ」や「蜜蜂と遠雷」のような、クラシック音楽をテーマとした TV ドラマや小説が高い支持を得るようになった事とも無関係でないと考える。2 つめは、この日本におけるクラシック音楽の位置付けが、かつて (20 世紀) のような「ステイタス・シンボル」ではなくなり、サブ・カルチャーの 1 つとなった<sup>(3)</sup> ことである。クラシック音楽が特別な音楽ではなくなったことから心理的な敷居が除かれ、「理解できる／理解できない」から「好きか好きでないか」というような、他のジャンルと同列で考えられるようになり、却って気楽にクラシック音楽に接することが

できるようになってきたと考える。それと同時に、ネット配信でプロ顔負けの演奏パフォーマンスを披露するユーチューバー等の存在も見逃せない。ポップスやダンス・ミュージック等と同列でクラシック音楽に接することで、新たな支持層を生んでいる。加えて、人はクラシック音楽を聴く時、思考力や論理性が養われている<sup>(4)</sup> ことや、生楽器 (アコースティック楽器) で生み出される音と演奏が、現代に特有のストレスの解消に寄与している<sup>(5)</sup> ことも、この集計結果の要因であると考えられる。

クラシック音楽は、他のジャンルの音楽と比較して、多分に構造的な音楽である<sup>(6)</sup>。一部の小品を除き、楽曲構成が複雑で規模も大きいため、1 曲あたりの演奏時間も長くなる。その上、聞こえるか聞こえないかのピアノシモから大音響のフォルティシモまで、ダイナミックレンジの幅が広い作品も多い。従って、移動中に携帯音楽プレーヤーやカーステレオで聴くにはあまり向いていない音楽であり、BGM として流しておくよりも、意識的に「聴く」ことが求められる傾向が強い。そのため、授業時に腰を据えて視聴することは 1 つの適切なクラシック音楽との接し方であり、これをきっかけに 1 人でも多くの学生にクラシック音楽の魅力を知ってもらえればと考えている。

質問⑤「ジャズについて」の集計結果は、概ねクラシック音楽のそれと同様であった。この要因についてはすでに質問③のところで述べたので、ここでは割愛する。

質問⑥において、「音楽への理解が深まった、あるいは聴き方に変化が感じられた。」の回答と、「多少は理解ができたような気がする、あるいは多少の変化が感じられた。」の解答とを合わせて 137 名、割合にして 94% という数字を得られたことは、筆者を少なからず勇気づけるものであった。「はじめに」で述べたように、ある魅力的な音楽作品について、その理由をわざわざ説明することは、ジョークの面白さを説明することと質的に変わりが無いのではないかと、というような疑問を筆者は抱いていたが、授業を通して音楽の聴き方に変化が感じられた受講生が多かったこと、授業を通して新たに興味を持ったジャンルが生まれ得たことは、その疑念を払拭するとともに、音楽の魅力の伝え方や、

歴史や背景、音楽理論などを含めた、より有意義な付帯事項についての探求心を刺激するものであった。

最後の質問である質問⑦「印象に残った作品」についての調査は、授業で取り上げる作品を選別するにあたり、今後の参考とするために行った。全部で29の選択項目のうち、上位8曲まではいわゆるスタンダードな曲目である。音楽に長らく携わっているとどうしても、誰でも知っているような曲をわざわざ取り上げるまでもないと考えがちであるが、有名な曲には有名になった理由や経緯が必ずあり、それを知ってもらうことは決して無駄ではないこと、また、それぞれの音楽ジャンルや各授業回のテーマに対する1つの取っ掛かりとしての、必要性の高さを認識した。これは例えば、民族音楽をテーマとした授業回で扱った作品に関して、民族音楽そのものに対しては少数が選択するに止まっているのに対し、民族楽器（ここではインドのシタール）をロックに取り入れたビートルズの「ノルウェイの森」が上位に挙がっていることでも説明できる。既に馴染みのある音楽のほうが、そうでない音楽よりも人は基本的に入りやすいのである。

また、第9位にジョン・ケージの作品「4分33秒」が挙げたことも興味深い。この作品は4分と33秒の間、演奏者は楽器の前に座ったまま何も演奏せず、音も出さないという、挑戦的な、また哲学的とも言える作品である。授業においてこの作品を映像で流すと、途中でクスクスと笑い出す、目を見開いて画面を凝視する、終わってみて啞然とする等、実にさまざまな反応を学生は示す。20世紀を代表する作曲家の1人であるジョン・ケージは、無響室を体験したときに着想を得たということ以外に、この作品については多くを語らないが、彼は「音楽は音である。コンサートホールの中と外とを問わず、われわれを取り巻く音である」という言葉を遺している。これは、メロディーやリズム、ハーモニーといった要素から成り立つ通常の音楽の概念とは真っ向から対立するものであり、「音楽」というものの定義を根本から考えさせられる言葉でもある。受講生にとって一種の思考ゲームとなってくれば、との思いから毎年紹介しているが、この曲に関する事に限らず、今後はリアルタイムアンケートシステム等を活用することで、受講者の意見や感想をその

場で共有できるような授業形態にしていきたいと考えている。

## 5. まとめと今後の展望について

授業時間内での調査という時間的制約から、自由記述欄を設けないような甚だ簡便なアンケート調査となったが、音楽に説明や理屈を加えることの是非、西洋クラシック音楽の扱い方など、ここから得られたものは多かった。

第一に挙げられるのは、歌を歌ったり楽器を演奏したりする事だけが音楽との接し方ではなく、優れた音楽作品がもつ歴史的・文化的背景を知ることや、その作品の成り立ちを基礎的な音楽理論も交えて論ずることは、音楽の専門家を目指す者ならずとも、何らかの意義があることが分かった点である。考えてみれば、たとえばロックやポップスのCDにしばしば付いているアーティスト自身によるライナーノーツが、その作品に対するリスナーの理解や共感を深めていることは紛れもない事実であるし、クラシックやジャズにおける曲目解説もまた、作品理解の一助となっているからこそ付けられているものであろう。こうした要素を一步進め、授業であればこそ論じられるような内容に踏み込むことで、受講者の今後の音楽体験や音楽との接し方への1つの提案となれば、授業の担当者としては幸いである。

次に挙げたいのは、これは筆者の専門が西洋クラシック音楽であるが故にでもあるが、受講者のクラシック音楽への関心が、考えていたよりも高かったことである。馴染みのある曲を題材として音楽の成り立ちや音楽理論を学び、歴史的な背景として例えば19世紀における市民階級の台頭とロマン主義との関係にショパン等のロマン派の作曲家の作品を絡めることで、ただ漠然と音楽を聞くのではなく、高校の世界史で学んだ知識と合わせて、何かを感じ取ろうと意識的に作品を鑑賞する姿勢が受講者の間に生まれたと考えている。

21世紀に入ってから「ティーチング・アーティスト」(略して「TA」)が誕生した。作品の魅力や聴き所などのエントリーポイントを示し、リスナーが感じたことや意見などのフィードバックをもとに、双方向のコミュニケーションを行いつつ作品の魅力を手伝いに伝えてい

くという、人々を音楽の世界に導く職業である<sup>(7)</sup>。むしろ、そこまで到達するのは決して簡単なことではないが、学生に音楽の魅力をより豊かに感じ取ってもらうための方法論として、大いに参考にすべき点がある。

音楽と接するにあたり、何よりも大切なのは「感じる心」であると筆者は考えている。従って、教養として音楽を学ぶ上で、数々の要素が単なる知識に止まっているは何の意味もなく、音楽による感動（注：感激とは別）に結びついた時、それらは初めて意味を持つ。

イギリスの指揮者ベンジャミン・ザンダーは、講演『音楽と情熱』<sup>(8)</sup>の中で、多くのクラシック音楽の専門家は、「クラシック音楽を好む層は僅か3%であり、これが4%にでもなれば満足だ。しかしそうなったところで何が変わるのか。」というような考え方をしているが、自分の考えは違っており、本当は皆クラシック音楽が大好きなのだが、それに気付いていないだけで、と語っていた。また、ジョン・レノンを始めとして多くのアーティストが、人と人をつなぐ手だてとして音楽ほど素晴らしいものはないと口を揃えている。

今回の調査で、学生の音楽への思いの一端を窺い知ることができた。今後は、音楽から感じたことや意見を受講者どうしがその場で共有することで、受講者にとってより豊かな音楽体験となるような授業の進め方を工夫する必要性を強く感じた次第である。

## 謝 辞

貴重な授業時間を使っただけのアンケートにご協力を頂いた「音楽の世界／芸術の世界」の受講生の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

## 参考文献, URL

1. 『図解雑学CDでわかる音楽の科学』（ナツメ社 2009）  
p.60  
岩宮眞一郎
2. 同上 p.62
3. 『2018年問題とこれからの音楽教育』（ヤマハミュージックメディア 2017）p.64  
久保田慶一
4. 『心を動かす音の心理学』（ヤマハミュージックメディア 2011）p.82  
齋藤寛

5. 同上 p.75

6. 同上 p.82

7. 『ティーチング・アーティスト—音楽の世界に導く職業』（水曜社 2016）p.10  
エリック・ブース

訳者：久保田慶一，大島路子，大類朋美

8. ベンジャミン・ザンダー「音楽と情熱」

[https://www.ted.com/talks/benjamin\\_zander\\_on\\_music\\_and\\_passion?language=ja](https://www.ted.com/talks/benjamin_zander_on_music_and_passion?language=ja) (2019年9月30日最終閲覧)

